

《新刊紹介》

Gavin Kelly and Joop van Waarden (eds.),
The Edinburgh Companion to Sidonius Apollinaris

Edinburgh: Edinburgh University Press, 2020, pp. xviii+838.

三 谷 優 輝

西ローマ帝国滅亡前夜における国内情勢を伝える史料は断片的にしか残っていないものが多く、史料が少ない。このような史料状況であるため、シドニウスが残した、24 の詩歌と 9 巻に及ぶ書簡集は、この時代の歴史を叙述するうえで多くの研究者が扱うまとまった史料である。彼は、リヨンの名門家系に生まれ、ローマ都市長官まで務め上げた、いわゆるローマ的エリートでありながら、そのキャリアを捨て、聖職者として生きる選択をした人物であり、彼とその著作については、これまで多くの研究が行われてきた。本書は、編者である Kelly と van Waarden が 2013 年に立ち上げた、‘Sidonius Apollinaris for the Twenty-First Century’ というプロジェクトの一環として出された初のコンパニオンであり、イントロダクションにおいて指摘されているように、今後、シドニウスについて研究しようとする人にとってのバイブル的な存在となることを願って作られたものである。また、歴史学に限らず、様々な学問分野からの論文が掲載されている点も大きな特徴であるといえる。本書については、Meurer による書評がすでに存在している¹⁾。Meurer は、多様な観点から書かれているがゆえに、タコツボ化しつつある学問を是正する役割を果たすと評価している。本稿では、本書の紹介という形式で、内容について簡潔にまとめたうえで、特に興味深い章を 2 つ紹介する。

まず、本書の構成は以下のとおりである。

Gavin Kelly and Joop van Waarden, 「序論」, 1-9 頁

第 1 章 Joop van Waarden, 「ネガフィルムの描くシドニウスの伝記」, 13-28 頁

第 2 章 Ralph W. Mathisen, 「シドニウスのプロソポグラフィ研究と地名の整理」, 29-165 頁

第 3 章 Gavin Kelly, 「シドニウスの作品の年代特定」, 166-194 頁

第 4 章 Michael Kulikowski, 「シドニウスが生きた政治世界」, 197-213 頁

第 5 章 Sigrid Mratschek, 「シドニウスが生きた社会世界」, 214-236 頁

第 6 章 Sigrid Mrathscek, 「シドニウスにおける文化の創造と自己提示」, 237-260 頁

第 7 章 Lisa Kaaren Bailey, 「シドニウスと宗教」, 261-275 頁

第 8 章 Isabella Gualandri, 「シドニウスにおける間テキスト性」, 279-316 頁

- 第9章 Annick Stoehr-Monjou, 「シドニウスの残した頌詩」, 317-340 頁
 第10章 Franca Ela Consolino, 「シドニウスの残した短詩」, 341-372 頁
 第11章 Roy Gibson, 「シドニウスの書簡」, 373-392 頁
 第12章 Étienne Wolff, 「シドニウスの使用する語彙、構文、文体」, 395-417 頁
 第13章 Joop van Waarden, 「シドニウスの書簡における親称の敬称の違い」, 418-439 頁
 第14章 Silvia Condorelli, 「シドニウスにおける韻律」, 440-461 頁
 第15章 Joop van Waarden and Gavin Kelly, 「シドニウスにおける散文のリズム」, 462-475 頁
 第16章 Franz Dolveck, 「シドニウスの写本伝承とその調査」, 479-542 頁
 第17章 Luciana Furbetta, 「15-19 世紀におけるシドニウス研究」, 543-563 頁
 第18章 Silvia Condorelli, 「20-21 世紀におけるシドニウス研究」, 564-617 頁
 第19章 Roger Green, 「シドニウスの作品の翻訳の試み」, 618-627 頁
 第20章 Ralph W. Mathisen, 「シドニウスの作品の最初期の受容と流通」, 631-642 頁
 第21章 Tina Chronopoulos, 「中世におけるシドニウス作品への注釈」, 643-664 頁
 第22章 Jesús Hernández Lobato, 「中世およびルネサンス期におけるシドニウス」, 665-685 頁
 第23章 Joop van Waarden, 「16-19 世紀におけるシドニウスの受容史」, 686-704 頁
 第24章 Filomena Giannotti, 「19 世紀後半から 20 世紀におけるシドニウスの受容史」, 705-729 頁
 Gavin Kelly and Joop van Waarden, 「結語：シドニウスの今後の研究方法について」, 730-736 頁

本書は 6 部に分かれている。第 1 部「シドニウスの人生、作品の特徴と年代の特定（第 1 章 - 第 3 章）」では、シドニウスという人物自身に注目した研究が並ぶ。第 1 章では、シドニウスが残した作品に依存しすぎない形でのシドニウスの人生を描こうとする試み、第 2 章では、シドニウスを中心にしたプロソポグラフィ的研究、第 3 章では、シドニウスの残した作品が書かれた順番を特定しようとする試みが行われている。第 2 部「政治的、社会的、宗教的文脈におけるシドニウス（第 4 章 - 第 7 章）」では、シドニウスが生きた時代に関する研究が続く。第 4 章では、シドニウスの生きた時代とその後の数年間におけるガリアにおける政治史についての概観が行われている。第 5 章では、シドニウスを取り巻く社会状況について、貴族階級の余暇の文化や書簡を通じたネットワーク、儀礼や宗教、同時代における蛮族観などの多岐にわたる視点から考察している。第 6 章では、シドニウスの文学的性格と、社会的な役割との密接な繋がりについて指摘しながら、その自己提示においてプリニウスの影響を受けていることを明らかにする。第 7 章では、自己提示の中で宗教との関わりを強調しないシドニウスが宗教、特にキリスト教といかに付き合っていたのかということを明らかにしている。第 3 部「文学的文脈におけるシドニウスの作品（第 8 章 - 第 11 章）」では、文学作品としてのシドニウスの作品の分析の章が続く。第 8 章では、シドニウスの作品における、彼以前の作品からの借用など、間テキスト性に関して考察されている。第 9 章では、シ

ドニウスが残した3人の皇帝に対する頌詩を分析し、彼が頌詩の作成を通して目指したことについての考察が行われる。第10章では、シドニウスの詩歌がいかに革新的なものであったかを説明しようとする試みが続き、第11章では、シドニウスの書簡のスタイルにおける共和政期からの継続性が考察されている。第4部「シドニウスの使用する言語と文体(第12章-第15章)」では、シドニウスの作品に対する言語学的アプローチが続く。第12章では、シドニウスの使用する語彙や文法、文体についての考察、第13章では、T-V distinction²⁾がシドニウスの書簡には適用できないことが明らかにされており、第14章では、シドニウスの詩歌に見られる韻律の技法に関して考察されている。第15章では、シドニウスの作品に見られる散文のリズムの分析が行われる。続く第5部「写本伝承と学問研究の歴史(第16章-第19章)」では、シドニウスの作品が後世においていかに伝承され、研究されてきたのかが明らかにされている。第16章では、写本伝承についての分析が、第17, 18章では、各時代においてシドニウスに対して行われてきた研究の簡潔な紹介が行われている。第19章では、これまで行われてきた翻訳の試みについてのまとめた後で、Green自身がマヨリアヌス帝に宛てた頌詩の導入部の翻訳を行っている³⁾。最後の第6部「古代から現代におけるシドニウスの読者たち(第20章-第24章)」では、シドニウスの受容史が語られる。第20章では、シドニウスの作品が刊行された直後の受容について、トゥールのグレゴリウスなどの著作家たちを利用しながら示されている。第21章では中世、第22章では中世からルネサンス期にかけてシドニウスの作品がいかに使われたかを明らかにする。第23, 24章では、16世紀から現代にいたるまでの受容史について述べられている。

以上が本書の紹介である。この簡潔な紹介だけを見ても様々な学問分野の研究の集積であるかはよくわかる。また、出版された目的通り、学問分野にかかわらず、今後シドニウスについての研究をしようとする読者にとってのバイブル的な存在であるだけでなく、一部英語圏以外の研究の翻訳も掲載されているため、英語圏に限らない学術研究の成果を見ることができるといふ点についても評価できるように思われる。

ここで、シドニウスの蛮族観というテーマに絞って、第5章と第9章について触れておきたい。第5章の第6節にあたる部分では、シドニウス自身が属する社会のロールモデルとして「高貴な野蛮人」という概念を導入して蛮族観を語る。すなわち、ゲルマン人であっても文化的・言語的にローマの支配体制に同化しているものは蛮族とは考えず、蛮族である西ゴートの王テオドリック2世を理想的な君主として考えていたというのである。また、第9章では、シドニウスが政治的安定性を確保するために皇帝とエリートたちの間の団結を目指すという目的ではあるものの、アウイトゥス帝とマヨリアヌス帝に宛てた頌詩には、蛮族に対する融和的な見方を強調する箇所もある点が指摘されている。ここで挙げた2つの章における蛮族観に関する指摘は部分的なものであることに加えて、前者の場合、書簡と頌詩の両方を根拠として使用しているため、シドニウス個人の立場と帝国としての立場が混合して描かれているようにも思われる。また、第9章のように頌詩間の比較は行われているとして

も、通時的に帝国の変化を見ることのできる史料であるにもかかわらず、その変化を明らかにしようとする研究は現状不足しているように思われる。この点については、今後の研究に期待したい。

註

- 1) Tabea. L. Meurer, “Review of: Gavin Kelly and Joop van Waarden (eds), *The Edinburgh Companion to Sidonius Apollinaris*”, *BMCR* 2020.11.19, 2020. URL: <http://bmcr.brynmawr.edu/2020/2202.11.29/> (2024 年 1 月 18 日確認)。
- 2) ラテン語の *tu* と *vos* の頭文字をとったもので、親称と敬称の間の使い分けに関する議論である。
- 3) Green による翻訳の完全版は 2020 年に出版されている。Roger Green, *Sidonius Apollinari Complete Poems Translated with Introduction and Commentary*, Liverpool University Press, 2022.